

調査報告

石橋家資料について

本 田 佳 奈
川 久 保 美 紗

はじめに

佐賀県立図書館では平成二〇年から二二年にかけて石橋家資料の整理をおこなった。幕末期に活躍した石橋三右衛門長賢（一八〇八〜七九）の遺した記録類は、幕末佐賀藩海軍伝習所と有田皿山窯業の実態を伝える好史料として一部の研究者には知られてきたものの、所蔵資料の全体像については不明であった^①。今回の調査では上記資料を含む三八七七点以上の所蔵資料の調査・整理・仮目録作成をおこない、その全体像を明らかとすることを目的とした。

これらの整理作業には佐賀大学地域学歴史文化研究センターの協力を得た。なお資料公開については傷みや虫損といった保存状態を考慮し、原本の閲覧は現段階において行わない予定である。

一、所蔵調査と整理の過程

佐賀県立図書館は平成二〇年一〇月と同二一年五月に石橋家における資料の保管状況を調査・確認した。保管状況は表1のとおりである。保管場所は母屋の一階と二階、離れの倉庫の三ヶ所であった。資料を入れた段

ボール箱、書箱、鏡櫃、木箱、長持などの容器一・二点が確認された。段ボール箱以外すべて江戸時代のものと考えられる。高さが一メートル弱の書箱（箱4・5）や幅一・四メートルの長持などは大変な重量がある。明治初年、石橋家は佐賀城下から現在の居住地である杵島郡白石町へ転居しているが、資料の移動には相当な労力が必要だったにちがいない。先祖伝来の資料を大切にしたい石橋家の人々の思いが偲ばれる。

母屋一階には三右衛門に関する文書類、母屋二階には漢籍・和書など、離れの倉庫には江戸時代の書状類、明治末〜大正時代にかけての海運業資料や学童記録類が集中している。

白石町に居を移して以来、石橋家による資料の整理のほかに三右衛門に関する外部からの資料調査が度々おこなわれ、現在のような保管状況となったと考えられる。

なかでも鏡櫃（箱9・10）の底の敷紙は昭和一〇年の福岡日日新聞である。このころ、当主の長次氏によって整理がおこなわれたのではないだろうか。また長持（箱11）は上層部が明治期の杵島郡行政資料、下層部が江戸期の漢籍となっており、こちらもまた資料の再整理がおこなわれた形跡がある。

佐賀県立図書館ではこれらの容器ごとに仮題名と主たる収蔵資料を記した調査票を付して撮影し、平成二一年六月に図書館へ搬入した。館内では

表1 石橋家における資料の保管状況

場所	箱	収納器	サイズ (mm)	収容点数	形態	概要	
母屋	縁側	1	ダンボール箱	400×280×140	240	書状	初代三右衛門跡目相続資料 二代目三右衛門皿山代官資料
		2	ダンボール箱	280×400×300	250	日記類・書状	二代目三右衛門資料（日記・御門出入他） 明治期資料（日記・海運業）
	仏間	3	床間の引戸棚	150×135×262	30	卷子	行列・料理献立・厨子・調度品・什器等
	2階納戸	4	書箱	255×308×955	70	書籍	『小学句解』『論語』『歴史綱鑑補』
		5	書箱	427×305×928	190	書籍	『日本外史』『勝茂公御年譜』『焼残反故』
		6	書箱	442×320×732	200	書籍	刊本・和本
		7	書箱	225×290×731	70	書籍・新聞	『日本外史字類大全』『日本地誌略』 新聞記事スクラップ
		8	書箱	430×370×225	50	書籍・書類	明治期学校・土地売買（地所賃入・永代売渡証、書入証）
倉庫	2階	9	鏡櫃	370×370×500	110	書状・書類	明治期海運業関係（電報・計算書・修繕見積書）
		10	鏡櫃	380×420×510	1500	書状・書類	書状・覚・領取書ほか
		11	長持	590×500×1480	270	書籍・書類	刊本（蘭学、本草学、浄瑠璃）・明治期杵島郡行政（調査、議案、決算書）
		12	木箱	150×350×235	130	書類	明治期学習記録（小学校～女学校）

以下の作業をおこなった。

① 容器ごとに概要調査

表を作成し、容器に

収納された資料の

「かたまり」ごとに

枝番号を付した。枝

番号を付した「かた

まり」は、上層から

一点ずつ番号を付

し、資料の形態・大

きさ・日付・内容な

どのデータを入力し

仮目録を作成した。

データ入力済の資料

は一点ごとに整理用

紙袋に入れ、保存用

段ボール箱に収納し

た。

② 刊本類は虫食いによ

る損傷が著しく、虫

干し作業をおこなっ

た。また継ぎ目のは

がれた書状類は継ぎ

直しをおこなった。

二、石橋家について―二人の三右衛門を軸として

石橋家はどうのような出自を持ち、どのような変遷を経て現在に至るのだろうか。『清和源氏石橋家族譜』『石橋三右衛門長賢御厚恩書』『系図』などの資料や現在の当主一弘氏への聞き取り調査から明らかにしてみたい²⁾（図1参照）。まず石橋家の出自を示す資料として挙げられるのが、『清和源氏石橋家族譜』（以下『族譜』）である。清和天皇を頂点に明暦年間までの二七代の当主の名前と根拠地や歴史的背景が記された系図となっている。成立年と作成者は不明であるが、最後の当主万九郎については若くして急逝した旨やその職歴、碑銘などが詳細に記されている。おそらくは万九郎の父である三右衛門長賢が嫡男の死後に『族譜』を作成したと考えられる。

この三右衛門長賢の曾孫が、「はじめに」で紹介した幕末期に活躍する三右衛門長江である。本稿では両者が混同しないよう、初代三右衛門、二代目三右衛門と表記したい。

『族譜』によると、石橋家は古くは足利太郎家氏の血筋を受けており、南北朝動乱期の当主和義から初めて石橋姓を名乗るようになった。和義は南朝の足利忠冬に属して転戦の末、肥後守俊之に従って西下し、佐賀に定住化したとされる。佐賀での明確な記録は寛文年間の平野村（現在の佐賀市大和町）に始まる。この地で石橋家は清兵衛、兵右衛門、清左衛門の三代に渡って居住しており、清左衛門は菩提寺の好昌院に堂宇と仁王像を奉納し、田畑を寄進している。当時の石橋家はある程度の余財を有する家へと成長していたことが窺える。³⁾その後清左衛門は佐賀城下へと転居している。

年	当主	居住地
貞和年中 (1345~50)	和義・宣義親子 ↓ この間不明 ↓	関東から肥前国へ移住 ↓
寛文年間 (1661~72)	清兵衛 兵右衛門 清左衛門 二右衛門 	佐賀郡平野村（現佐賀市大和町南部） ↓ 佐嘉城下へ転居 ↓
明和5（1768）	初代三右衛門 万九郎（早世） 三平 四郎右衛門 	佐賀城下唐人町（現佐賀市天神町）から 中佐賀郷愛敬嶋村（現佐賀市愛敬町）へ転居 川原小路（現佐賀市川原町）へ転居 ↓
天保13（1842）	二代三右衛門 	松原小路（現佐賀市松原一・二丁目）へ転居
明治9（1876）	チョウアイ 長藹	竜王村字深浦（現鹿島市白石町）へ転居
明治20（1887）	 長次 一弘	松原小路の屋敷を売却 現在にいたる

この清左衛門の孫に当たるのが先出の初代三右衛門である。初代三右衛門は『族譜』のほか平野村時代の話や自身の半生をまとめた年譜『石橋長賢御高恩書』（以下『御高恩書』）を遺している。これによると、初代三右衛門は一五才の御初見以来三〇余年、御絵図方御境目方に勤めた。深堀・三重・大村領境や千栗境川筋境、高木郡東神代と諫早領土黒村の境、

長崎戸町・西泊番所境など、他藩との境界線の明示化を目的とした絵図の作成に従事した。やがて境目方下役から下目付役へ、さらには三九才で附役へと昇進すると、同時に侍格と切米二〇石を扶持された。また五九才で足軽組頭となり、晩年には切米四〇石を扶持されるまでに出世した。喧嘩沙汰が頻発し、緊張度の高い領界問題を抱える御絵図方御境目方において

『清和源氏石橋家族譜』『系譜』そのほか石橋家資料より作成

図1 石橋家系図と居住地の変遷

て、初代三右衛門はその重責に値するに優れた人物だったのではないだろうか。(年表1参照)。

初代三右衛門の名跡を受けつぎ、さらに石橋家の家格を上げたのが曾孫に当たる二代目三右衛門長江である。長崎御番所、三重津海軍所、有田皿山代官職を経て切米四二石を拝領し、三四才のときに足輕組頭から手明組頭へと昇格した(年表2参照)。二人の三右衛門が出世するに従って、石橋家の屋敷は唐人町から中佐賀郡愛敬嶋村、川原小路、松原小路と、より城に近い上級武士の居住地へ移動している(図1参照)。

明治維新後、石橋家は藩の払下げ地である竜王村字深浦へ移転し、現在にいたっている^⑤。

三、資料紹介

整理の結果、資料の総点数は三八七七点であった。また資料には上野家資料が混在していたことが判明した。これは二代目三右衛門の二男助作が上野家の養子となったことが関係している。維新後、石橋長藹(兄)と上野助作(弟)は家族とともに竜王村の払い下げ地へ入植した。現在の当主一弘氏は、後年上野家が転出した際に、書籍類を預かったことを父長次氏より伝え聞いている。主な資料の内容は以下のとおりである。

1. 江戸中期～幕末期資料(約一七二〇点)

(1) 初代三右衛門長賢資料(約七〇点)

先に述べた『族譜』は佐賀城下以前の石橋家の来歴を示す唯一の資料である。また『御高恩書』には早世した父三右衛門から二才で家督を継ぎ、

親族や継父の援助によって成人した過程が記録されている。江戸時代中期における藩士の家督相続のありかたを示す資料といえよう。また弘道館の役職にあった息子万九郎が急逝した際、その碑銘を作成したのは弘道館教授である古賀精里だった(『族譜』)。

(2) 二代目三右衛門長江資料(約一六四二点)

「はじめに」でも述べたように、幕末期の三重津海軍伝習所や皿山窯業の実態を伝える資料が知られていたが、三右衛門はそれ以外にもさまざまな役職にあり、佐賀・長崎・江戸・大坂といった地で役職にあたったことが確認された。

① 長崎御番所関係(嘉永元～文治元年)

『長崎御番所詰日記』(嘉永元年一～一月までの公務日誌) 『御非番方来状控』(安政二年卯三月) 『御非番方御達書其他控』(卯三月) など。そのほか年代不明だが滞船中のフランス・イギリス船や白帆船に関する書状・口達覚など三〇点。

② 大阪詰時代(安政三～四年)

『大坂紀行』(安政三～四年の日記) など。

③ 三重津海軍訓練所時代(安政六年)

『口達録』 『御屋敷御門出入刻限控帳』 など。

④ 江戸御屋敷詰時代(文久元～二年)

『桜田御屋敷御門出入調写』(文久元年頃) 『御門出入控』(文久二年一～一二月) など。

⑤ 第一次長州戦争(元治元年)

軍令の書写など。

年表1 初代三右衛門長賢

年	西 暦	年 齢	職務の事柄・昇進・昇格
享保15	1730	1	佐賀郡唐人町に生まれる。名は清次郎
〃 16	1731	2	父二右衛門死去
寛保2	1742	13	半元服
〃 3	1743	14	前髪を取り、名を清左衛門長賢と改める
延享1	1744	15	藩主宗義へ初御目見
〃 3	1746	17	御絵図方御境目方下役を仰せ付けられる
〃 4	1747	18	深堀・三重・大村領境目の論所地において「海上出入藻取ノ筋双方百姓大争論」がおこる。問題解決のため大村藩家老へ使者が派遣され、清左衛門は見習いとして随行する
〃 5	1748	19	大川筋の「荒籠水刷」について、佐賀・久留米・田代の大庄屋ら證文を取り交わす
寛延3	1750	20	①深堀・三重・大村論所の取り合いが起こる ②御絵図方御境目方役内下目付を仰せ付けられる
宝暦1	1751	22	組年寄役を仰せ付けられ、一斗御加増される
〃 2	1752	23	深堀・三重・大村領境目の論所地において、海山の境界線を決定する
〃 4	1754	25	藤津郡・大村領境の一本松倒木の件を決着する
〃 5	1755	26	①日田代官が千栗境川を通船する際に立ち会う ②平戸領境目役近藤丈右衛門が佐賀城下へ罷り越す
〃 6	1756	27	久留米城下において番船から度々発砲され、通船差留となる
〃 8	1758	29	①高木郡東神代と諫早領土黒村境目の出入の場所を和談の末に差し分ける ②日田代官が千栗川境大川を通船する際、久留米側が境の杭木を抜く事件が起こる ③千栗川筋を絵師古賀字十と共に密々に歩き、絵図作成のための調査をする
〃 9	1759	30	①千栗川筋絵図を完成し、差上げる ②御城御境川取合がおこる ③佐賀郡川副郷大詫村と柳川領大野崎村の境木を植え立てる ④御境目方下目付を仰せ付けられる ④役米3石、飯米3石6斗を宛て行われる ⑤手明鑑に召し成される
〃 11	1761	32	切米7石となる
明和1	1764	35	長崎両番所の境目に杭木を立て、御番所絵図を作成の上深堀長崎請役所長崎御仕組所へ納める
〃 2	1765	36	長崎両番所絵図作成の功により切米を3石加増される
〃 5	1766	39	①中佐賀郷愛敬嶋村へ引き移る ②三右衛門と改称する ③侍に召し成され、切米20石を拝領する ④御絵図方御境目方役に仰せ付けられる
〃 6	1767	40	①深堀石村境において双方百姓の間で騒動が起こり、解決として絵図、證文、奥書を交換する ②御上下を拝領する
〃 7	1770	41	御料にて深堀の論所において取り合いが起こる
〃 8	1771	42	千栗川筋久留米領より仕向の儀に付度々検分をおこなう
〃 9	1772	43	川原小路へ引き移る

『石橋長賢御厚恩書』より作成

年表2 二代目三右衛門長江

年	西 暦	年 齢	職務の事柄・昇進・昇格
文化5	1808	1	生まれる
天保13	1842	34	足軽組頭となる 周防組に所属する
嘉永1	1848	40	長崎御番所詰
文治1	1864	46	
安政3	1856	48	切米42石（内役米7石）を拝領する
〃 4	1857	49	大坂詰となる
〃 6	1859	51	手明鑑組頭となる 長崎警備
文久1	1861	53	江戸桜田御屋敷詰
〃 2	1862	54	
元治1	1864	56	第一次長州戦争に従軍
慶応2	1866	58	有田皿山代官
〃 4	1868	60	
明治初年			松原小路から杵島郡竜王村へ転居
明治9	1876	68	病氣療養のため竜王村から精（しらげ）へ転居
〃 12	1879	71	卒去

『系図』『屋敷御帳控』そのほか石橋家資料より作成

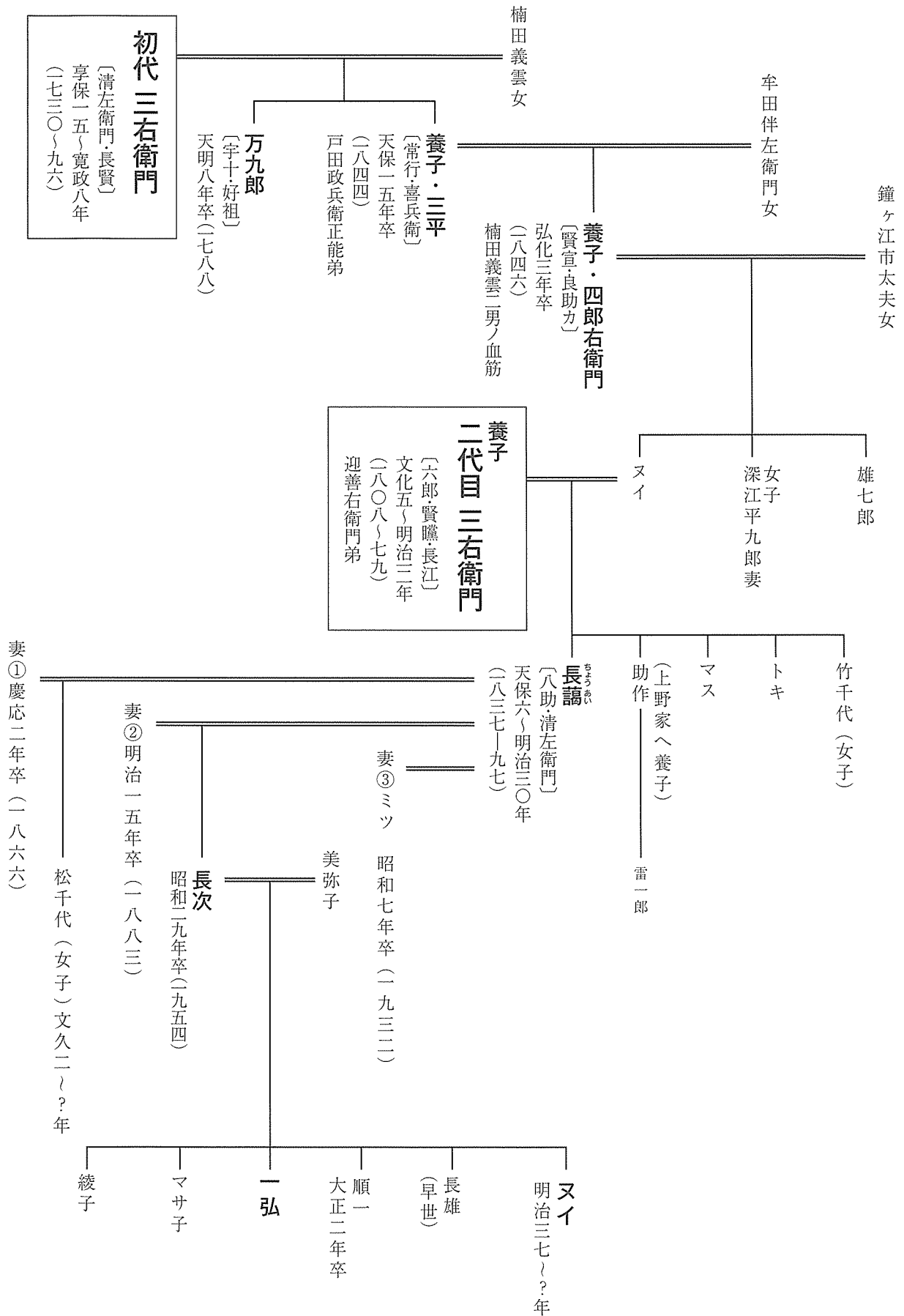


図2 石橋家系図

⑥ 有田皿山代官（慶応二〜四年）

『御厨軍右衛門書状』『三之丸御小姓頭書状』など。

⑦ 日記、家族・知人との私信その他

草場佩川の書状や、佩川が讃を添えた三右衛門の漢詩などがあり、両者に交流があったことを示している。なお江戸桜田・溜池御屋敷、長崎御番所、三重津海軍所といった明確な地名に欠けているものの、御門出入りに関係すると思われる資料が約七〇点確認された。

2. 明治〜昭和初期資料（約五一〇点）

① 杵島郡内の行政資料・土地売買資料

② 海運業資料（幸光丸・寿丸事務長記録類）

③ 家政資料（明治三〜二八年までの日記書簡類、学童・女学校記録、徴税記録など）

3. 典籍（約六〇〇点）

書籍は資料全体の六分の一を占めている。『直茂公御年譜』『勝茂公御年譜』といった佐賀藩士としての基礎的教養から歴史・儒学・武術・礼法・漢詩・和歌・俳諧と、中流武士階級の家にふさわしい幅の広い文化教養本が揃っている。二代目三右衛門が江戸日本橋や大阪で書籍を購入した記録も残っており、代々に渡って書籍の集積に努めたものと考えられる。なお石橋家蔵書印は一九点、上野家蔵書印は二五点確認された。主な書籍名は以下のとおりである。

① 漢籍・和漢籍・和本

【佐賀藩士の基礎教養】

『直茂公御年譜』『勝茂公御年譜』『御壁書』『鍋島茂里』『葉隠』

【幕末の史書・思想書】

『日本外史』『頼山陽輿地封建二略論』

【歴史物語・軍記物】

『真書太閤記』『真田三代実録』『櫻井之書』『焼残反故』『英彦山由来大略』『諫早実録』『大和物語』

【儒学・兵法書】

A. 朱子学……『晦庵先生朱文公文集卷』『近思録』『孔子家語』『集義和書』
B. 孫子……『孫子』『孫子抄』

C. 熊沢番山……『備前国執政太夫熊澤先生傳』『集義和書』『集義外書』

【武術・礼法】

『古今鍛冶備考』『宝蔵院流十文字鍔口伝書』『会席主客心得大概』『茶道便蒙抄』『料理物語』

【漢詩・和歌・俳諧】

『日本名家詩』『日本名家詩抄』『名所和歌集抜書』『花供養』『辛酉集』『詞歌集』『詩法入門』

【実用書】

『一覽博識卷』『錦囊智術全書抜書』『諸家系図帳』

② 本草学・医学関係

『医療手引草』『誠求集』『本草薬名備考』『合類医学入門』など。

医学館に関する書状（断簡のため年代不明）や薬の煎じ方法に関する書状のほか、「医特意耳思慮精則得之」と記された一言書があることから、医療に従事した人物がいたと考えられる。

おわりに

石橋家は関東武士の出自という由緒を以って佐賀郡平野村にその礎を置き、佐賀城下へ移った後は本藩に仕える中級役人としての家格を築いた。その核となったのが絵図方に勤めた初代三右衛門と有田皿山代官を勤めた二代目三右衛門であった。明治維新の版籍奉還以後、石橋家は払い下げ地である竜王村において、三右衛門の子孫たちによって海運会社や満州鉄道関連会社での勤務という新しい時代を築いた。今回の三八〇〇点余りの資料調査によって、これまで不明であった石橋家の成立と変遷を含む全体像が明らかとなった。とりわけ二代目三右衛門の関係資料は一六〇〇点を超える。皿山代官そのほかの職務に関連する書状・日記・手覚類に記載された人名・役所名・内容の分析を行うことで、幕末維新期の難局を乗り切るべく現場で格闘した中級役人たちの実務解明の一助となるだろう。

また石橋家の知的財産とも言べき六〇〇点もの典籍が確認された。石橋家は藩校弘道館の古賀精里や草場佩川といった佐賀藩一級の知識人と交流があったことも確認されており、これらの典籍は一つの藩士の家に育まれた知的環境を探り得る好資料群である。これらの佐賀藩の歴史、家の歴史を語る貴重な資料群を大切に保管してこられた石橋家の方々へ敬意を表すとともに、本館の調査に御協力してくださった石橋一弘夫妻に感謝申し上げます。なおこの調査は本館の資料課郷土調査担当職員である石橋道秀、野口禎子、串間聖剛、川久保美紗、本田佳奈を中心におこなったものである。

謝 辞

佐賀大学地域学歴史文化研究センターの伊藤昭弘准教授には資料解説に御協力をいただいた。また図書館サポーターである永松亨、山本美子、箕輪薫、平川由佳理各氏には資料解説や煩雑な整理作業において多大な御助力をいただいた。末尾ながら深くお礼を申し上げる次第である。

(1) 石橋家資料のうち三重津海軍伝習所に関する『海軍伝習到着到』『日記』『口達録』など一七点は佐野常民記念館(佐賀市川副町)に寄贈されている。また多久島澄子「英人モリスと経輪舎(四)」(『からすんまぐら』平成七年三月)には安政六年『口達録』『外出録』が引用され、石丸虎五郎他四名が電流丸での訓練とともに夜は通詞から英語を学んでいた事例を紹介している。

有田皿山窯業の資料については前山博「石橋代官資料について」(『鍋島藩とその周辺』伊万里市郷土研究会編 昭和五〇年)や『有明町史』(有明町教育委員会 昭和四四年 一七一〜一七三頁)などに紹介されている。

(2) 『清和源氏石橋家族譜』については、本館への寄贈は受けていない。『系図』は佐賀県立図書館鍋島家文庫(鍋21112)。

(3) 瑠璃光山好昌院。臨濟宗南禅寺派。『天和町史』八四〇頁。

(4) 唐人町は現在の佐賀市唐人一〜二丁目、中佐賀郷愛敬嶋村は佐賀市愛敬町川原小路、松原小路は同市松原一〜二丁目にあたる(『佐賀県の地名』平凡社 昭和五五年 一七六・一八〇・一八四頁)。

(5) 竜王村は現在の杵島郡白石町の一部。

(佐賀県立図書館資料課郷土調査担当嘱託)